

仙台城茶室「残月亭」と武家茶道の 茶室考（二）



仙台藩茶道石州流清水派

御 供 真 人

南より 吹きにし風の 匂ひきて

涼しささそふ ひなのすまひに

（仙台藩祖伊達政宗公御詠）

仙台城茶室「残月亭」から宮床への道の先

前回、仙台城茶室残月亭から青葉山の御裏林を抜け郷六屋敷に出、そこから根白石を経て宮床へ至ることについて詳細を述べました。

宮床伊達家は仙台藩五代藩主伊達吉村を出した家であり、吉村は、宝永七年（一七一〇）八月に立石上之茶亭を落成し数寄屋残月亭の額を掲げて残月亭と号し、続いて正徳四年（一七一四）孟夏に扁額を模刻し、立石上之茶亭に

懸け替えた、正に仙台城茶室残月亭の創建者といえる存在です。

今回は、宮床から続く道の先について、石州流清水派の茶室庭園とともに考えます。

建築家首藤尚丈氏は次のように述べております。

郷六より、さらに一時間の歩行で権現森下の綱木へ行き
：綱木から根白石の大満寺へと右廻りに至る。：そこから
山を一つ越すと、泉ヶ岳の裏の「七つ森」に至るのだが、
そこには「宮床」があり：宮床からさらに吉岡・榎沢を経
て、色麻・中新田と行くと岩出山へと至るのである。：大
満寺から宮床伊達家まで十二kmの道程で走馬すれば三〇分
である。：さらに中新田までは、三十四kmあるので大満寺
より一時間三〇分で名生城に至り、岩出山まで四十五kmで
あるから、馬をとばせば、ほぼ二時間ぐらいで岩出山城に
到着できる。：この岩出山には、岩出山城という伊達の居
城があった。この城に政宗は仙台に移るまで十二年間居住
した。この城の縄張りには、「徳川家康」自ら榊原康行（筆
者注：康政）に命じて行ったというから、恐らく当時は、
大変な山城であったはずだ。青葉城の落城後に、第二次戦
を、ここで行うには十分な場所である。：

なお、郷六から宮床を経て、吉岡、色麻、中新田、岩出山へと続く道は羽後街道とも呼ばれ、仙台北城下から出羽国庄内藩酒田湊を結ぶ奥州街道の脇街道です。松尾芭蕉と曾良が、岩出山から鳴子の尿前番所を経て出羽三山への参詣に向かった道でもあります。

では、なぜ仙台北城から宮床を経由し岩出山へ至るのでしょうか。

宮床伊達家と岩出山伊達家

その答えが、大和町宮床宝蔵の展示資料『宮床領の意味①・「御三家」説』にあります。以下に引用します。

なぜ宮床に伊達家本家とごく近い血筋の宮床伊達家が置かれたのでしょうか。

幕府では徳川本家と血筋の近い御三家を置いて、本家に跡取りが絶えたとき、そこから將軍家を迎え入れる方法をとっていました。紀州徳川家出身の吉宗公がその例です。

同じように、産物が豊かで戦いの時にも守りやすい宮床に本家と近い血筋を確保しようとしたのではないのでしょうか。実際に五代藩主吉村公は宮床から出ました。

江戸に近い白石に片倉小十郎の家、亘理に伊達成実の家

という武勇に名高い両家を置き、宮床や岩出山といった奥まった所に近親を置いた配置に、江戸幕府に対する仙台北藩の意図が見えるようです。

岩出山城有備館庭園

仙台北藩祖伊達政宗公は永祿十年（一五六七）八月三日に米沢城で生まれ、天正十八年（一五九〇）の葛西大崎一揆の後、天正十九年（一五九一）九月二十三日に豊臣秀吉の奥州再仕置により米沢から岩手沢に本拠を移すこととなり、秀吉の命により家康によって修復された岩手沢城を居城としました。政宗公は岩手沢に入るとこの地を「岩出山」と改め、仙台北城に移る慶長八年（一六〇三）までの十二年間本拠としました。朝鮮出兵や京都での暮らしが長く、岩出山城に居たのはわずかな期間でしたが、仙台北藩へと続く基礎固めがされた時期でもありました。その後、岩出山城は四男宗泰に与えられ岩出山伊達家が誕生しました。

有備館は、岩出山伊達家二代宗敏が寛文三年（一六六三）に岩出山城二の丸が焼失の際造営した仮居館（御蔭館）が始まりです。現存する有備館の「御改所（主屋）」は、宗敏の隠居所として延宝五年（一六七七）に建てられた可能

性が高い建物で、下屋敷としても利用され「対影楼」と呼ばれました。(図1)

本館新築後の元禄四年(一六九一)、岩出山伊達家三代敏親がこの仮居館に手を加えて「春学館」と名付け学問所とし、翌元禄五年(一六九二)に通学便利な下屋敷のあった現在地に移築して「有備館」と名づけ、以来明治までの一七七年間、郷学として親しまれ藩校として全国でも最古の建物と伝えられています。

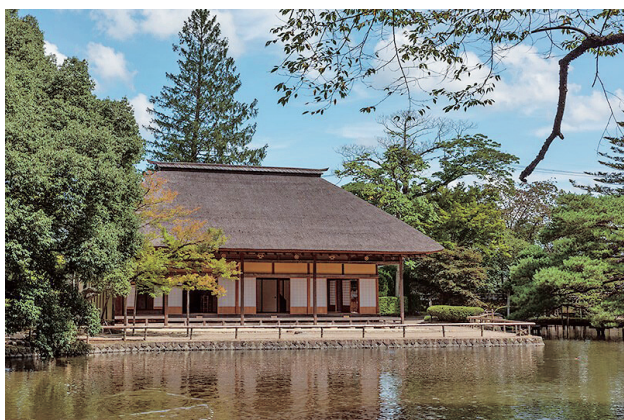


図1 有備館御改所
「庭園ガイド」ホームページより引用

注目すべきは享保元年(一七一六)七月二十二日、仙台藩主伊達吉村が岩出山の居館に一泊し、宗敏の隠居所(有備館)に寄ったと記録があり、正徳五年(一七一五)に岩出山伊達家四代村泰が吉村をもてなすために石州流清水派の祖三世清水道竿(寛文二年〜元文二年―一六六二〜一七三七)に作庭させたことです。

仙台城から宮床を経て岩出山城へ至る道が、吉村の命で三世道竿が作りあげた仙台城茶室残月亭と岩出山城有備館庭園から浮かび上がって来たと伝えましょう。

庭園は岩出山城の断崖を借景とした景趣に富んだ大名庭園で、中心となる大きな池の中に御中島、鶴ヶ島、亀子中島、兜島の四つの島を配し、御中島には茶亭があり島に渡る橋が架けられ、南岸には出島といわれる大小二つの半島が突き出ています。(図2)

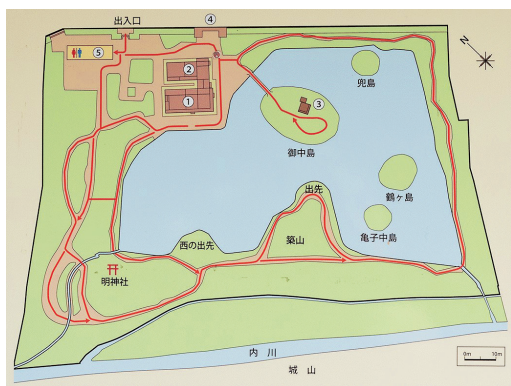


図2 有備館庭園図
「庭園ガイド」ホームページより引用

茶亭は三世道竿作と言い伝えられ、昭和五十年（一九七五）復元で「松花庵」と呼ばれ、四畳半一重宝形造こけら葺、南東が庇付で下は縁淵を回しています。水屋は、小二畳敷一部簀子張となっています。（図3）



図3 有備館茶亭「松花庵」
「旧有備館および庭園ウェブサイト」ホームページより引用

また、三世道竿はこの庭園を造る前に岩出山城下のうち上野目の須藤家、二の構の阿部家、浦小路の名取家、上川原町の栗原家の四家の屋敷に作庭し、又、岩出山城屋敷内（岩出山高等学校のひょうたん池付近）に池を試作したと伝えられています。

なお『関』二十七号に十一世大泉道鑑師が寄稿された「仙台藩茶道石州流清水派の祖三世清水道竿の業績（その二）道竿の作庭と伝わる庭園」に詳しく紹介されていますので、ご一読ください。

明治維新後の明治二年（一八六九）に有備館の御改所と附属屋は岩出山伊達家の居宅となり、庭園とともに守り伝えられてきました。昭和八年（一九三三）二月二十八日、居宅と庭園は「旧有備館および庭園」として国の史跡及び名勝に指定され、昭和四十五年（一九七〇）に岩出山伊達家の厚意により岩出山町（現大崎市）に移管され、一般に公開されるようになりました。

葛西大崎一揆

岩出山城のすぐ近くに名生城（みようじょう 大崎市古川）があります。名生城は、古代には名生館官衙が置かれ、

中世には奥州探題の大崎氏の居城でした。

天正十八年（一五九〇）十月十六日、秀吉が封じた新大名木村吉清の苛政に対し葛西氏・大崎氏の旧臣等が一揆を起し、大崎氏旧臣が名生城、岩手沢城、宮崎城（加美町）等を、葛西氏旧臣が葛西氏居城であった寺池城（登米市登米町）を占拠して拠点としました。吉清父子は佐沼城（登米市迫町）に籠城、同年十一月二十四日に政宗公に救出されました。

佐沼城は再び一揆勢が取り返し、激しい戦いが続きましたが、翌天正十九年（一五九二）七月二日、伊達勢により落城、ここに一揆は終結しました。（図4）



図4 葛西領・大崎領
「郷土歴史探訪」ホームページより引用

一揆の後、葛西氏・大崎氏の旧臣の多くは帰農し郷士となりました。筆者の伝承する武術西法院武安流武者捕は幕末から登米辺室山の郷士である柴田家、千葉家、袋地家から多くの伝承者を輩出しましたが、辺室山の郷士は葛西氏旧臣の末裔と伝えられています。

佐沼城亙理氏庭園

葛西大崎一揆の後、家康は岩手沢城のほか佐沼城の普請を行い、政宗公に岩手沢城を居所とするよう勧め、また、佐沼城に湯目民部景康を配するよう助言したといわれます。湯目氏は後に津田氏と改姓し、七代丹波定康までこの地を支配しました。宝暦六年（一七五六）、七代藩主伊達重村の不興を被って所領没収・改易となり、宝暦七年（一七五七）に亙理伯耆倫篤が移され、以後亙理氏の居城となり、現在は本丸・二ノ丸の一部が鹿ヶ城公園として整備されています。佐沼城の西側に隣接した高台にある庭園は三世道竿の作庭による露地（茶庭）と伝えられ、岩出山城に続いて津田氏時代に作られたものと考えられます。

現在は茶室等の一部の修復はあるものの、作庭当時の旧態を保持しており、庭園から望む佐沼城の堀池の上段に配



図5 佐沼城亘理氏庭園「登米市歴史博物館」ホームページより引用

置され、堀池とその奥に城下町の風景を借景とし、また、庭内の飛石や敷石を主体とした簡素な構成には仙台藩茶道頭としての作庭者の心境が伺われます。庭園内植栽の中で最も目立つのは庭の中央に主木として作庭時に植えられたと見える赤松で、見事な樹姿を保っています。(図5)

庭園及び建物は亘理家より佐沼町(当時)に平成七年(一九九五)十月寄贈を受け、現在は登米市により管理されています。

東奥老子夜話・木村右衛門覚書に見る仙台御陣御内試

四代藩主伊達綱村の時代、元禄から享保に至るころに仙台藩士であった者が藩内の古い文献や伝聞を集めて書き残した『東奥老子夜話』には「元和二年(一六一六)、大坂御陣落居以後、(將軍家)仙台出馬の由にて御陣触れ御座候」「仙台御陣の御触に付、御内試の事」とあります。元和元年(一六一五)五月八日に大坂城が落城して豊臣家が滅亡した翌年、つまり、元和二年(一六一六)四月十七日に家康が没したのち、二代將軍徳川秀忠が仙台の政宗公を成敗するべく軍勢を催すという噂が流れ、仙台防衛作戦構想を立てさせたというのです。このことは同時代の諸大名の書

簡等でも、次のとおり確認できます。

元和二年（一六一六）一月十一日付け、江戸の細川忠興から国元九州小倉にいる息子細川忠利あて書状「政宗之事、今に色々申し候、雑説とも誠と共知れ申さず候、内々陣用意然るべく候（政宗について真偽不明の噂がある。内々に「陣」の用意をしておくように）」。

一六一六年二月二十九日（元和二年一月二十三日）付け平戸のイギリス商館長リチャード・コックスの『イギリス商館長日記』「皇帝（家康）と彼の息子で、義父マサモネ（政宗）殿の後ろ盾を受けているカルサ（松平上総介忠輝）様の間に戦争が起こりそうだ」。

元和二年（一六一六）二月六日、長州の毛利輝元より江戸の家臣あて書状「奥州表御出陣之様、世上風聞候、事実候は其方より可申越と存候て有之事候、具承度候（将軍が奥州表に出陣するという風聞がある。事実かどうか確認して詳しい情報を送るように）」。

政宗公の小姓が記録した『木村右衛門覚書』にも、政宗公は将軍家の真意を確かめるため家来百四十五名と共に江戸に出向き、弁明のため家康の居る駿河まで馳せ上りつつ、万が一に備えて仙台防衛作戦構想を命じたとあります。

その内容は領境防衛作戦であり、先ず正面となる南方面のうち、太平洋沿岸の浜通りは、亘理の伊達成実と角田の石川大和に駒ヶ嶺、新地を固めさせ、阿武隈川河口を「最後所（最終防衛線）」とします。

幕府軍主力が奥州街道を進撃する中通りの福島筋は、白石の片倉小十郎に、丸森の西南の山の内の阿武隈川を堰き止めさせ、福島平野を水浸しにして通行不能とします。これは、令和元年（二〇一九）の東日本台風の阿武隈川流域浸水域と重なります。さらに、越河（こすこう）に張り番を出させて斎川を防衛線とします。

西方面のうち、米沢筋（上杉勢）は白石城を拠点に七ヶ宿街道の関、渡瀬、戸沢筋を固め、最上筋は笹谷峠を固めます。

北方面の奥勢（南部勢）に対しては、伊沢（胆沢）より北を金ヶ崎城（岩手県胆沢郡金ヶ崎町）の留守氏に抑えさせます。

『東奥老子夜話』には領境の防衛線を突破された後の作戦も記載されており、「さて仙台川を藤塚・関上辺にてせき留、藤塚へ番勢を被指置（名取川河口の藤塚（仙台市若林区）・関上（名取市）で堰き止めて名取川一帯を氾濫させ、

藤塚に警備部隊を配置」、「御裏林より砂押へ御馬を被出。砂押御鉄砲蔵の南の山。にか峯に御旗を被出。御対陣可被成との御内試にて。（後に残月亭が置かれる二ノ丸より御裏林を抜ける間道を使い、砂押と三神峯（何れも仙台市太白区）に出て本陣を置くとの作戦計画である）」とあります。

政宗公の隠居所「仙台屋敷構」と称して築城した若林城（仙台市若林区）は『貞山公治家記録』によれば「仙台の入口、海道（街道）の見付には残所なく見ゆる出丸なり」とあることから、三神峯と若林城を東西の出城に、名取川を外堀とする仙台城防衛陣を構築し敵主力を拘束します。そして仙台城の御裏林より別動隊を出し、現在の東北自動車道沿いに坪沼、菅生、村田を南下する林子平先生がよく使った裏街道より、奥州街道と阿武隈川の水陸交通が集まる要所である大河原や槻木等で補給路を撃ち、また、敵主力の背後より挟み撃ちにする作戦です。

更に仙台城を落とされた場合は、「御戦場より直に桃生郡横川、追波（いずれも北上川河口）の湊へ御引入」れ、北上川の船を引き取り、「葛西大崎の如く、百姓一揆を御起こさせ」遊撃戦で消耗させ、機を見て「無二の御合戦」を仕掛けるか、または「敵押入事難叶切所（敵が侵入する

ことが難しい険しい難所）」「遠島（江島（女川町））入口隘路二口（雄勝（石巻市）・女川（女川町））御座候」「何も大切所（大難所）にて人数押入候事、成かたき地形に御座候」である牡鹿半島を最後の砦とし時節を待つ持久戦を行います。

そして武運拙く敗れた時は「松島瑞巖寺御取立の事」「御運命尽きた時は御最後之場との思召」として、景勝の地であり古代からの霊場である松島に入り、瑞巖寺で切腹する、伊達者らしい戦略でした。

そう見せかけて月浦からメキシコ、ローマに出帆した支倉常長のごとく、三陸沿岸より蝦夷地や海外へ脱出し再起を図る、という政宗公らしい雄大な説もあります。

仙台御陣御内試と北上川

登米伊達家初代白石（伊達）相模宗直は登米寺池城主となり、城下町づくりと新田開発のため、慶長十五年（一六一〇）に登米市中田町水越地点を締切り、北上川を二股川の河道に導きます。宗直の名により「相模土手」と呼ばれています。（図6、7）

その後、仙台領産米を石巻に集め、江戸に廻米し藩財政



図 7 現在の米谷大橋付近
「北上川の概要と歴史」ホームページより引用



図 6 伊達相模宗直の工事後
「北上川の概要と歴史」
ホームページより引用

の基盤を確立するため、政宗公は川村孫兵衛に命じて河口石巻を中心とする内陸水運網の整備に当たらせました。孫兵衛は短台地峡を開削して江合川を迫川と合流させましたが、これが仙台陣の噂が流れた元和二年（一六一六）のことです。次いで元和九年（一六二三）より神取山地峡を開削して北上川を迂回させ、寛永三年（一六二六）に北上川・迫川・江合川の三川合流という大仕事を仕上げます。（図8、9）

旧北上川と江合川が合流する要所、神取山に隣接する高須賀（石巻市桃生町）には、遠藤家を頭とする直参足軽が置かれました。筆者は二十数年前、高須賀の白髭神社の直会に参列させていただいた折に、遠藤家ご当主より「高須賀足軽は、平時には桃生郡はもちろん、北上川河口の石巻の湊で騒動があれば船で下り警固を行い、いざ戦となれば藩公を守り前線を担う任を命じられていた。」と伺ったことがあります。当時は「藩境でもない桃生が何故前線なのか」と不思議に思いましたが、この高須賀の伝承こそ仙台御陣御内試の証ではないでしょうか。

仙台城落城の折は、仙台城残月亭から脱出し、奥州街道沿いに岩出山城と佐沼城へ敵主力を釣り上げ拘束しつつ、登米寺池城より北上川を下り雄勝・女川に本陣を据え、登



図9 現在の神取橋付近
「北上川の概要と歴史」ホームページより引用



図8 川村孫兵衛の工事後
「北上川の概要と歴史」
ホームページより引用

米寺池城や桃生等を拠点に、北上川・迫川・江合川・鳴瀬川流域や伊豆沼・品井沼等の河川湖沼の水上交通を利用し、「葛西大崎の如く百姓一揆を御起こさせ」遊撃戦を展開することになりました。

仙台藩領の茶

さて、これまで仙台御陣御内試を見てまいりましたが、その舞台となる仙台藩領は、寒冷地にもかかわらずお茶の産地であったことは、あまり知られていないので触れてみます。政宗公が、領内に茶の樹を植えさせ、茶作りに力を注ぎ、大名茶人の桑山貞晴に国元で栽培した茶を送り「奥州の宇治と思し召しになるでしょう。おかしいことです」と述べた書状も残されています。(仙台市史資料編 伊達政宗文書番号一九五七)

まずは仙台城下。筆者の母校宮城県仙台第一高等学校(仙台一高 仙台市若林区)の住所は、元茶畑。連坊小路の南側、柴田町の西側、東南むきの斜面に沿った陽当たりのいい場所で、寛文十一年(一六七二)頃から茶の木が植えられて元禄八年(一六九五)まで藩の茶畑として使われ、畑の中を孫兵衛堀が流れていました。茶畑廃止後は侍屋敷に



図10 奥州街道の宿場町
「奥州街道とその繁栄を支えた宿場の光と影」
ホームページより引用

なって元茶畑という地名となり、茶畑だった所は東半分が仙台一高の敷地となっております。

次に吉村出身の宮床の近くの富谷宿。映画『殿、利息でござる』の舞台となった吉岡宿と七北田宿の間にある宿場町です。(図10)

映画でも、瑛太演じる吉岡宿の茶師、菅原屋篤平治が茶を栽培し銘茶のブランドを立ち上げる姿が描かれています。が、実際、富谷はお茶の産地でした。現在の内ヶ崎家別邸

近くの坂の上に茶畑が広がり「富谷茶」として知られていました。仙台を起点に蝦夷松前（現在の北海道松前町）までの宿場を歌にした『奥道中歌』で「国分の町よりここへ七北田（ななきた）よ 富谷茶のんで味は吉岡（よしおか）」と詠われたように、奥州街道を往来する旅人が富谷茶を楽しんでいたようです。当時の製茶は品質もよく、仙台藩主へ献上されていたほか、京都まで出荷されたと伝えられています。

最後に高須賀のある桃生。昼夜の寒暖差から霧がかかりやすい北上川の川沿いで古くから茶の栽培が行われ、「北のお茶所」と呼ばれてきたと云います。一般的に新茶の時期は「夏も近づく八十八夜」で有名なとおり立春から八十八日目ですが、寒冷地の桃生では五月中旬頃の百八日目に収穫を行うため、「百八茶」とも呼ばれています。百八歳が「茶寿」に当たることから、縁起物としても親しまれています。

明治六年（一八七三）の統計では、旧仙台藩領である宮城県のお茶は全国四位の生産量を誇りましたが、機械化が進まず、明治・大正の頃から生産力のある地のお茶に押され、次第に生産量は減り、生産農家も姿を消していきました。

しかし現在、富谷茶や桃生茶等、仙台藩領のお茶が再興しつつあることを嬉しく思います。(図11)



図11 伊達茶
映画『殿、利息でござる!』の主人公穀田屋十三郎のご子孫が営んでいる吉岡の穀田屋で販売されている桃生産のお茶

まとめ

仙台城茶室「残月亭」の創建者である五代藩主吉村は、藩祖政宗公の内陸水運整備策を受け継ぎ、仙台藩領産の米を水運により北上川河口の石巻湊に集め、江戸に廻漕して換金する買米仕法を再編強化することで、藩財政を一気に好転させ中興の祖と呼ばれました。十八世紀初めから中頃にかけての江戸市中に出回った米のほとんどが、仙台産であったと言われているからです。

同様に、政宗公の葛西大崎一揆の経験を踏まえた仙台領の防衛戦略を受け継いだ吉村が、政宗公が隠居所「仙台屋敷構」として若林城を築いたように、富国強兵策の一環として、仙台城、岩出山城、佐沼城の茶室庭園作りを三世道竿に命じたものと考えられます。

更に云えば、家康が普請し幕府に手の内を知られている岩出山城と佐沼城は改修を行なう必要があったのではないかと、それは三世道竿が有備館庭園と亘理氏庭園を城の出丸となる位置に作庭していることから推察されます。

参考文献(五十音順)

『阿武隈川緊急治水対策プロジェクト【中間とりまとめ】』

阿武隈川上流大規模氾濫時の減災対策協議会・名取川・

阿武隈川下流大規模氾濫時の減災対策協議会

令和元年(二〇一九年)十二月二十六日

『「奥州の竜」伊達政宗 最後の戦国大名、天下人への野望と忠誠』

佐藤貴浩 角川新書 令和四年(二〇二二年)

『奥の細道 他四編』 麻生磯次訳注 旺文社文庫

昭和四十五年(一九七〇年)

『関』二十七号 十一世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会

「仙台藩茶道石州流清水派の祖三世清水道竿の業績（その2）道竿の作庭と伝わる庭園」 平成二十九年（二〇一七年）

『関』三十一号 御供真人 全日本石州流茶道協会

「仙台城茶室「残月亭」と石州流清水派」

令和三年（二〇二一年）

『関』三十二号 御供真人 全日本石州流茶道協会

「仙台城茶室「残月亭」と武家茶道の茶室考」

令和四年（二〇二二年）

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』

十世大泉道鑑 昭和五十五年（一九八〇年）

『柔術西法院武安流武者捕』 柴田茂

平成二十一年（二〇〇九年）

『戦国日本と大航海時代―秀吉・家康・政宗の外交―』

平川新 中央文庫 令和元年（二〇一九年）

『仙台市指定有形文化財旧姉齒家住宅茶室「残月亭」修復

工事報告書』 仙台市（受託者：佐藤巧古建築研究会）

平成十一年（一九九九年）

『仙台市史資料編10伊達政宗文書1～4』 仙台市

平成六年（一九九四年）～平成十九年（二〇〇七年）

『仙台市史通史編5「近世3」』 仙台市

平成十六年（二〇〇四年）

『仙台市史特別編7城館』 仙台市 平成十八年（二〇〇六年）

『伊達家治家記録』 宝文堂

昭和四十七年（一九七二年）～昭和五十七年（一九八二年）

『茶の湯文化学』三十三号 十世大泉道鑑・十一世大泉道鑑

茶の湯文化学会 『動閑茶湯書』の解説と校注（その一）

『露地之書』 令和二年（二〇二〇年）

『茶の湯文化学』三十七号 十世大泉道鑑・十一世大泉道鑑

茶の湯文化学会 『動閑茶湯書』（その二）『茅葺數寄屋寸

法』 令和四年（二〇二二年）

『政宗の黄金の城（まち）』 首藤尚丈 プレスアート

平成八年（一九九六年）

『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』

文化庁・宮城県教育委員会 平成二十八年（二〇一六年）

映画『殿、利息でござる！』 中村義洋監督 磯田道史原作

平成二十八年（二〇一六年）

講演『政宗の謀反の噂と若林城』 東北大学名誉教授平川新

令和三年（二〇二一年）十月六日

展示資料『宮床領の意味①・「御三家」説』 宮床宝蔵

ホームページ『奥州街道とその繁栄を支えた宿場の光と影』
まっふる

ホームページ『北上川の概要と歴史』

国土交通省東北地方整備局北上川下流河川事務所

ホームページ『北上川の歴史』

国土交通省一関防災センター北上川学習交流館

ホームページ『旧有備館および庭園ウェブサイト』

大崎市教育委員会文化財課

ホームページ『郷土歴史探訪』 歴史倶楽部

ホームページ『町名に見る城下町』

仙台市若林区役所まちづくり推進課

ホームページ『庭園ガイド』

新日本三大夜景・夜景100選 事務局

ホームページ『富谷しんまち 奥州街道宿場町』

富谷しんまちプロジェクトby富谷市

ホームページ『登米市歴史博物館』 登米市歴史博物館

ホームページ『宮城の庭園』

一般社団法人宮城県造園建設業組合